

『青大将』

原田 樹

沈黙は濃霧の様でありました。まつ毛にぬるい滴を感じます。額の汗が伝ってきたのです。もう、三分間は目の黒い大蛇と相対しています。

真つ黒い瞳に三角形の頭でこちらを仰ぎ見ているのは青大将です。しかしその体色は普通の緑や青ではなく鈍い黒色で、優しい色の夏草に囲まれている分、よりどす黒く感じられました。

沈黙の膠着を破るために左の脚を上げました。じりじりと距離を詰めます彼との視線は合ったままで、黒だけの瞳が、何の感情も示しているか分からずに恐ろしく感じました。中腰になり手を近づけて素早く右手でもたげた鎌首を掴みました。途端太長い胴体は激しくなつて絡み付き、三分以上格闘して虫かごにいった時には手首に赤い痕がくつきり刻まれておりました。

かなり大きなかごの中でさえ、窮屈そうにとぐるを巻いている青大将は今までみてきたどんな蛇よりも黒く大きく、重みがありました。こんな獲物を捕まえられたことが嬉しくなり、しびれた右手の痕さえ誇らしい健闘の証となっていました。黎明の澄んだ空からの朝焼けに照らされた鱗は鈍く虹色に輝き、見とれる程美しい、傷ひとつない巨大な青大将は、暴れていたのが嘘のように綺麗なとぐるを巻いてその体より更に黒い瞳でじつとこちらを見ていました。

捕まえた青大将を取り敢えず部室に持ってきて、水入れを準備する時間もなく前から部室で飼育していた雌の青大将のケースに入れて授業に出ました。

放課後に移すケースをセットし雌の方を開けようとする、驚いたことに二匹は交尾を始めていました。これは明日にならなくては終わらないと考え刺激がないよう静かにふたを閉じて帰途に着きました。

帰り道は静かな幸福感に包まれていました。人生のなかで最大の獲物を見事に捕まえたこと、交尾が成功し子供が生まれたらもっと青大将が増えることは私の大きな幸福だったのです。

翌日の朝に部室に来ると交尾は終わっていたので雄をケースに移して、雌に冷凍した鼠を解凍して給餌し、雄のケースにも放っておきました。再び授業が終わり放課後に来ると、雄は餌を食べていませんでした。しかし捕まえたばかりの青大将が警戒して餌を食べないのはよくある事なので気にしないで健康状態を調べるために雌を取り出し掌に乗つけました。祖父の庭先で拾った卵から孵した雌は人間に良く馴れていてとぐるを巻いたまま掌の上でリラックスしています。二年前に解した卵を譲ってくれた祖父は動物を愛する人でした。一年前には呆けが進行し施設に入れられる程で、私の事を知らない

人と認知していたので祖父との最後の思い出がこの青大将なのです。祖父が祖父であった最後の繋がりとなったこの青大将は北海道で拾った卵で、蝦夷ブルー特有の美しい藍色の体をしています。交尾後一日だからなのか、若干いつもより重みを感じました。

「動物は人間を良く観ているものだ。それは蛇も同じで、こちらが愛を持って接すればあちらは安心と誠意を示すし、適当にやるとあちらもこちらに無関心になるよ。だから大切に育ててあげなさい。」

二年前の祖父の言葉には七十年以上北海道の自然の中で暮らしてきたという重みと説得力がありました。時々、一年前に施設に訪問した時の焦点の合っていないもうろくとした眼とまるで寝ぼけたような呂律で、私を知らないと言ったときの情景を思いだして比べて、やるせなく悲しくなってしまう。

しかし祖父が言うようにこいつには安心とか誠意とか言ったおおよそ人間が抱くような感情を持ち合わせているのだろうか、瞳をじっと見つめてみても、応えることはなく、相変わらずいつもと同じ表情の、真つ黒な瞳と時々空を触る舌先以外には何も見出だせないのです。怒っているのか不満なのか安心しているのか、何を感じ何を目的に生きているのか、不思議な生物です。私に分かるのは美しいしなやかな体を持っているということだけで、精神や心の状態どころかそもそも精神や心があるのかさえ知りようがないのです。

油蟬の五月蝿い八月のある日、ケースを覗くと雌の青大将は歪なとぐろを巻いていました。産卵した卵に巻き付いていたのです。卵を他の容器に移さなければなりません。差し指と中指でとぐろをこじ開けようと思いました。

瞬間、敏感な指先に鋭い熱を感じました。驚くことに、これまで一度も人間を警戒しなかった雌の青大将が私に反撃してきたのです。それは自分に危害を加えるからという恐怖からではなく、母性本能から来る行動でした。これまでなんら感情を確認できなかったこいつは、人間と同じ、我が子を守るといふ尊い行動に駆り立てる母性的感情を持っているという事を、私の指に付いた鮮やかな血液が示していたのです。

いったい噛まれながら、私は卵を離して別容器に移しました。驚いたことに卵を十三個も孕んでおりました。一つ黄色く変色していた状態の悪いものは水槽横のタッパーにかけて、卵を孵化機に移しました。雌は卵を求めケースの中を体をしならせ右往左往しています。一度手で持ってみると、それは一昨日持ったときよりも、十三個もの卵の質量を失い、驚くほど軽くなっていました。交尾前より痩せているのです。そこでまた私はれっきとした愛を感じました。右手に付いた細かな噛み傷は、雌の気高い本能を示す母性愛の証となっていたのです。

多くの卵を生んだことに満足している反面、悩ませられることもありました。黒い青大将が餌を全く食べないのです。立派な体を維持するには多くのエネルギーが必要なのに一ヶ月は何も食べておらず、骨が浮き出て捕まえたときの太さも衰えています。この

ままではいけないと思ひ温浴をさせたり餌を変えてみたりしましたが一向に食べません。それに心配して私の食欲も減退する程でした。今日は、最終手段の無理やり口をこじ開けて餌を流し込む強制給餌をさせる日です。

黒い青大将の首を驚掴みました。餌を食べてないからか、捕まえたときのように激しく巻き付くことも出来ずただ体がうねるだけでした。口を左手でこじ開け、鼠をピンセットで押し込み、何とか飲み込ませてケースに戻しました。

帰り道は静かで、しかし大きな幸福感と安心感に包まれていました。とりあえず餌をあげたことで餓死は免れるでしょう。雌が卵を想像の倍も生んでくれたことで私と在りし日の祖父との繋りがより強固になったと感じられました。帰り道に無性に腹が減ったのでラーメン屋に寄りました。一仕事終えたあとのラーメンは一生の中で一番美味いラーメンでありました。

しかし現実は無情でした。翌日見てみると餌は吐き戻されていました。それで体力をかなり使ったのでしよう、雄はやつれた様子でぐったりとどろろを巻いていました。爬虫類病院で診て貰うと人間がいる環境に適応できない体質なのだと、いつそのこと逃がしてやる方が良くもしいれないと言われました。

帰り道に、他人事のように逃がした方が良いと言った医者顔の顔を思い出しながらケースを抱えて歩きました。逃がす。この行為がどれだけ私を揺るがす意味を持つのでしょうか。捕まえた青大将が一匹でも欠けた日々は、漠然と絶望に満ちていることが想像されました。

その後も少し間を空けて餌をちらつかせたり、活き餌をやったりしましたが全く効果はありませんでした。九月に入ったら確実に餓死するでしょう。孵化機の卵は膨らんで確実に成長しており、雌も体重を取り戻してきているのが、余計黒い青大将を惨めに感じさせました。

ついに九月になりました。雄の青大将はもう舌を出す気力すらありません。排泄もせず水も飲まず、とぐろに頭を埋めています。私は意を決しました。もう一回、強制給餌をしよう。そして駄目だったらもといいた空き地に返そうと。ぐったりした雄の首を掴もうとケースを空け右手を伸ばしました。

瞬間、黒い青大将は激しく鎌首をしならせ私の手首に顎まで噛みつきました。凄まじい熱が走り、驚いて首から手を離しました。急いで蓋をして横から覗くと、何事もなかったようにまたぐったりしていました。出血が止まりませんでした。その日はなにも出来ず失意のうちに帰途に着きました。

帰り道に噛みついてきた理由を考えました。私は恐怖から来る行動ではないと無性に感じており、むしろ気高い、野生生物としての最後の反撃のように感じてなりません。死ぬ前に、明日こそは自然に返そう、窓の外に夕闇のせまる総武線の中でそう考えました。

翌日の早朝に部屋に来ると、すぐに雄の青大将の蓋を開けました。青大将は、死んでいました。長い体をうねらせ、鈍く輝いていた腹を見せ、大きな口を開けて牙をむき出しに死んでいました。

私が殺したのです。これを見て祖父はなんと言うのでしょうか。自然と共に生きていた祖父ならば、医者に言われた時点で間違いなく逃がしていたでしょう。いや、しかしその祖父さえもう過去の人なのです。居るのは祖父だった、もうろくした人なのです。私は誰にも責められません。それがかえって私の絶望を助長させました。だれも私を叱責せず、恨むとしたらこの雄の青大将ですが、そんな感情持ち合わせていないでしょう。帰り道で感じていたあの幸福感は、傲りなのだと、飼育者の傲慢だったことを今更気づきました。私の餌やりによって生かされている、私無しでは生きていけない美しい青大将。それに私も依存していたのです。青大将以外は、誰も私を必要としなかったのです。

しかし雄の青大将は私など要らず、むしろ私のせいで死んだのです。餓死した様子は気高く、私の卑しさが尚更感じられました。

もうどうすることもできません。雄を埋めに行きました。雨上がりの湿った匂いのする土を掘り、長い体を折って埋めました。そして、持ってきていた雌を逃がしました。こいつの顔は、最早見るたびに私の弱い、醜い傷を広げるものでしかなかったのです。

黎明の朝焼けが、雌の舌を照らします。雌は以前雄を入れたかごから出ると、これまで育ててきた私の顔に一度も振り返らず、朝焼け色の雨粒が滴る夏草を這って消えました。こいつにも、私は要らなかつたのでしょうか。

放課後、残っていたのは空のケースと卵だけでした。卵は祖父との最後の最後の繋がりでした。しかしそれも、私の自己満足でしかなかったという結論に至りました。

斜陽。潰された命。くちやりとなった卵は歪な細長いものが入っているだけで、潰した罪悪感などなく、むしろこんなものをせつせと世話していたことに嫌悪感を抱きました。

そして校舎裏に卵だったものを埋めたあと、裏口から帰ろうとすると見慣れた尾っぽが聖母像に巻き付いていました。雌の青大将でした。

しばらく驚愕のうちに、雌の青大将を仰ぎ見ていました。夕陽が、私と聖母と青大将を照らしています。三分間は、相対していた気がします。私は願っていました。咬んでくれ、愛した子供を潰した反撃をしてくれと。殺して貰っても構わない、怒りを露に示してくれと、必死で瞳を見つめていました。そうでなくては、私の独りよがりの傲慢と、身勝手な清算は償えないものになってしまうのです。しかし、青大将はしばらく舌で空を舐めた後、去っていきました。私は、一生この十字架を背負うことを、聖母像の前で突き付けられたのです。

帰ってきて、雄の青大将に咬まれた傷に薬を塗っていると、驚いたことに、隔離して放置していた状態の悪い卵にヒビが入り、泡がふきでいていました。可愛らしい瞳が見え

ています。状態が悪くても強かに卵の中で成長していたのです。私はこの産まれてきて
いる青大将を精一杯育てようと決心しました。それが私の生きる唯一の理由になるから
です。この夏、青大将の気高さと孤独な人間の卑しい傲慢さを知らしめられました。し
かしそれでも良いのです、私は立派に生きれなくても、生きるしかないのですから。
あんなに五月蠅かった蝉も、もう鳴いていません。そよ風が金木犀の芳香を運ぶ以外
は、部屋は静寂でした。沈黙は濃霧の様でありました。